

コスモス

コスモス雑記(2~9)

緒方 宗平・和田 英子・暮尾 淳
村松 武司・宮田 正平・野口 清子
黒川 洋・近藤 計三・寺島 珠雄
北本 哲三・伊藤 正斉・河合 俊郎

■ 詩 ■

近藤 計三	長谷川七郎	村松 武司	宮田 正平	西 杉夫	黒川 洋	梁 性佑	姜 舜	和田 英子	高島 洋	寺島 珠雄	押切 順三
41	38	37	36	35	34	15	14	13	12	10	10
野口 清子	内田 博	伊藤 正斉	小野十三郎	暮尾 淳	河合 俊郎	緒方 宗平	秋山 清	さかたしげし	菅沼 瞭子	小宮 隆弘	北本 哲三
60	58	56	55	33 54	53	52	51	45	44	43	42

岡本潤特集

岡本潤回想	清水 清 (16)
ある反逆の詩精神	木原 実 (18)
岡本 潤論	吉田 欣一 (26)

私のリアリズム(11) 松永 浩介 (46)
プロレタリア詩の概念を変えられるか 高島 洋 (49)
管理される職場の詩人 木原 実 (50)
人民詩精神 秋山 清 (60)



真木の民家 大和出

小谷(おたり)は、長野県北西端にあり、新潟県に
境を接する過疎の村です。
かんてらは、全戸離れ無人となった真木部落に、
農場を拓き、再びこの村を蘇らせようとしています。

かんてら

ドキッとしたこと、

緒方宗平

新聞を見るとドキッとする感じがいつもでている。その方が多い。今朝（一月二十六日）の新聞もそうでドキッとした。原子炉衛星がカナダ北西部に墜落したというのである。原爆のおそろしきは被爆国の一人として知っている。前にアメリカのものも墜落したことがあるとしてあるが、ソ連であれアメリカであれどっちだって同じことだ。

「死の灰の危険性をはらんだ原子炉積載衛星が頭上をどきまわっている」というとゾッとする。衛星の打ちあげ中止を求めて国際世論を高めるべきだ」日本原爆禁止運動団体、反原発運動グループ、科

学者は驚きと怒りの反応を見せている。また「原水禁」では抗議の電報を打つ予定だ。

「今日のケースでも最悪の場合には原爆一ヶ分が爆発したと同じ灰をまき散らすことも警戒しなければならぬ。原爆投下のさいはどこに落すか人為的にきめられるが、しかし人工衛星は人口密度が極めて多いところに墜落する可能性もあり得ることを考えねばならない」と元大学教授はいっている。新聞で見るかぎりこのようになっている。

電報を打つあはれはなぜすぐには打たないのか、打てないのか、打って何か都合の悪いことでもあるのか、差し障りでもあるのか、といつて私にかえってくる。なぜかそのところかわからない。予定であるから打たずじまいになるかもわからない。そんなことにはましかねると思わないが、とにかく私はそう思った。

なければ一日も生きていけないが、ふだんそう思うこともないその空気のなかに死の灰が混っている

る、またいつわが頭上に墜落することがないといえないとしたら、全く背筋の凍る思いである。そして、詩を書くことには私はこのときふとしたそのことを書くことというのでなく、なんとなくそう思ったのである。（一九七八・一・二六）

トア・ロードなど

和田英子

群像4月号で「神戸」（佐々木基一）を読んだ。冒頭に「……戦後はただ一度、それも旅の途中にちよつと講演に立ち寄った……」とあるが、その一九五四年秋の講演会に私は出席した記憶があり「戦後文学について」の批評であったと思う講演の内容は、断片的に思いつくばかりだが、明せきな話しぶり、と、さつそうとした風姿は、今も憶えている。

場所はトア・ロードの上のあたり、明るい窓の印象が残っているので、日曜日の午後であったのだ

ろうか。もう二十年以上も前のこととでさだかではない。もつとも神戸らしい雰囲気をもつトア・ロードは今も健在だ。山手から浜へ北から南へのびたゆるい坂道は巾が広く、戦前からしやれた装飾品店や仕立てのよい中国人の婦人服店が並び、ひかえ目でシックな道である。

四、五年程前、詩の集まりの帰りみちで、一人が「合歡の木よ」と叫んだ。トア・ロードの両側にいつの間にか合歡の並木が並んでいる。「神戸人の神戸知らず」で市内を歩いていて驚くことは少なからずあるが、この時はいい方の驚きであった。今まで市内の街路樹は青桐かプラタナスが圧倒的で山の麓に静かに立つ合歡の木を、街中でみるのは始めてである。

「市は目に入る街の中の緑をふやしている反面、裏山を無残に削っているじゃないの」とおこつていた友人も共に幹に手をふれて「いわねえ」と言った。

以来、そのあたりを通るとき、樹々のようすを眺めるのが楽しみ

となった。西から東へゆるい風が

わたり、支那扇のような花が樹を飾るとき、店じまいの早い街に、同じように閉じている葉が山の奥を感じさせる午後八時すぎ、葉が落ちてしまふくれている人かげまばらな寒いころ。

神戸人は大体に執着心がうすくて、従って土地自慢もしない。

佐々木氏の「神戸」は戦争前後の神戸を自身の青春像と重ねて、いきいきと写し出している。読むうちに馴染み深い地名、出来事が出てきて、私の思いも忘れていたあれこれ思い出し、感慨深い、東京在住の氏が見た神戸は、客観的な上にやさしい思いに満ちて、神戸のよさを的確にうつつし出す眼は、神戸に住む者には面映いことでもある。

一九五四年頃は、ようやく戦災から街の体裁を整えた頃であった。それだけに気持のいい店があちこちにあつて、その所へ行けば安い費用で満足出来る品物が手に入り楽しむことが出来た。その頃トア・ロードに街路樹があつたかは思

い出せない。

二月・三月のこと

暮尾 淳

三月も終りとなつて、はやくこの雑記を書かなければと思いつつも、どこか気乗りしない気分があつて、やつと会社のデスクでいまペンを走らせている。その気分といふのは、特に深い根があるものではないのだが、急にになにか書くこととなると、うすつべらなままにきつとあのことを書いてしまうだろうという危惧がকাশし出すものであるらしい。

あのことは、二つづづいた葬式である。義母、父が、二月、三月と亡くなり、もちろんそのどちらにもぼくは喪主の側で名をつらねた。二人とも病院での死ではあつたし、前から覚悟はできていたから、ぼくは葬儀では、黙々とその役割をつとめたしで、それはそれでいいのだが、ぼくが弱いのはあの瞬間なのである。

火葬場の釜があり、そのなかに棺が入り、いよいよ引きだしたとき、目的以外のための全てを燃やしてしまつた、少しキツネ色の、ほろほろ崩れそうな、人の形に散つた、正しくそののみのごとく出来上り。ぼくは涙が出そうになるのである。弟のときも、金子さんのときもそうだった。

しよせん化学変化ではないかももちろん思う。けれどもわずかに時間かそこいらで、あんなにも骨の部分だけが、いかにも著でひろいやすそうにあがつてくるのだ。

おそろく焼場の理化学博士なんているにちがいないし、そんな研究の成果でもあるのだらう。

もとよりそのことを指して、残酷、非情などというにはちがうが、土葬とか、風葬とか、その類のゆつくりと朽ちる時間も、人間の肉体の最後にはあつてもいいのではなかろうか。

しかしよく考えてみると、人間は死んでしまつたら、その本人はどうでもよく、後は生きている側都合だけだ。どんなに立派な戒

名などつけられようと、つまり死んだ人間という物体は、この世にどどまつてせいぜい二日か三日がいいところで、ぼくらはそれを明日とは実感してないだけだ。役立たずの物体が、ながらく存在してはなにかと迷惑をかけることになる。

むかしの王様のミイラだとか、永久保存の政治権力者だとか、そのために泣くのはいつも民衆である。考古学的貢献なんて、現実の問題としては猟奇的にすぎようだ。

だからやはり死後も、パツと速く行くことが一番かも知れない。特にせまいこの国では、法律がそれを要求している。

想像力

村松武司

姜舜さんの訳で、申庚林詩集「農舞」を出版した。ある会合で鶴見俊輔さんから「大変でしょう？」といわれた。朝鮮文学の田中明さ

んから「大丈夫ですか？」ともいわれた。わたしは友人たちになり心配をかけているのかもしれない。経営的能力について信用がないのかもしれない。事実、取次店から小売店へ配本した約半数の部数のうち、三分の一が配本と同時にUターンして戻ってきた。出版屋のおやじならば性根を据えるべきところ、そのときは正直にいつて落胆した。

だが売らねばならぬ。訳者の妻さん、発売元の岡崎さん、発行者のわたし、三人で講演旅行して売り場にいる。その分の売行だけは手ごたえがある。旅行したさきさきで得た新しい友人たち、多くは朝鮮人・韓国人だが、彼らに負担をかけた。済まぬと思う。

今回の申庚林詩集について、わたしはひとつの感想をもつ。それを書いておきたい。

韓国で出版された原本を、在日朝鮮人の姜舜さんが日本語訳した。訳文について機会があれば読んでいたきたい。みごとな詩で、日本の現代詩人のうちで相当にうま

いといわれている人々のレベルを越えた詩篇がかなりある。姜さんの日本語が達者なのは、その理由のひとつにあてがっている。しかし訳文は、原詩の言葉の引力から逃れることは困難だから、日本語の達者というだけではこれはゆかない。この詩の訳は、日本にいて故国に帰ることができなくて、なおかつ原詩の意識に同調することのできる「想像力」に負うところが大きいというべきだ。

かりに訳者X氏が、韓国政府ならびに中央情報部の認可のもとに韓国に渡航し、原作者と会い、彼の環境である農村をつぶさに視察し、生活を見てきたならば、もつとよく描きうるだろうか？ つまり調査と情報によって訳文はいっそう完璧になるだろうか？

わたしはちがうような気がしてならない。私たちは今回の五巻の訳詩集を企画するにあたって、原作者を避けて向うの「ポイント」と目されるところにそれとなく連絡をとった。反応は拒否にちかきものがあつた。いまわたしたちに

確信が湧いている。こちらから連絡できぬ。向うを見ることもできない。情報断たれるならば断たれたところで、この詩はあたかも虚空に手を伸ばすようにして訳された。訳詩が力量を示したとするならば、その原因は、情報が断たれたところで飢え求めた訳者の「想像力」によるものだ。

原詩がよかったことも十分に想像できる。原作者たちは、農村近代化（セマウル運動）や高度経済成長を謳歌する官製宣伝のつづくなかで、なお体制批判の筆をゆるめていない。情報を拒絶するところに確立する非転向は、やはり「想像力」といふべきエネルギーによるものではないだろうか。

酒のある舞台

宮田 正平

酒好きはこと酒に関しては、異常なまでの関心を示すものである。酒について、着について——。ひととは度の過ぎた呑んべえとい

うが、少なくとも私も、ご同様にその例外ではない。和洋の酒と名のつくものについてはともかく、肴にはいつこう頓着しない。ひと摘みの塩でこと足りるという、無芸、無粋な酒飲みなのである。がただ一つ、芝居に出てくる酒、芝居で演じられる酒の場面にはこのほか心ひかれるものがある。

劇の中で演じられる酒の場というものは、もともとそこに何かのつぎきならない心のかげりがある。そのたゆたいに酒ということになるものなのである。

酒を飲んで、酔って、それが舞台を運ぶ芝居もいくつかはある。「魚屋五郎」などもその一つ。

幸奉公の妹が、不義をはたらいたとして斬られ、兄の宗五郎が酒をあおって邸内にあられこむという筋立て。怒った宗五郎が妹の死への忿懣の中で、飲むほどに酔いがピッチをあげて行くくどりが、役者のしどころ見せどころになっている。十五、六年も前に見た東京の歌舞伎座の舞台でも、松緑が世話ものの味を存分に見せた。

前進座の甌右衛門もその子の梅之助も良い芝居を見せている。いかに酒好きな私でも、宗五郎のように、飲むほどに酔うほどに、酒の力をかりて舞台に押しだし、芝居を盛り上げて行くどころか、途中でぶつ倒れてしまうだろうと思

いながらも、町人よがんばれと声援を送りたくもなろうというものである。

丸橋忠弥が雨合羽に千鳥足で江戸城の堀端に來かかり、酔態にとよせて石を投げ、煙管で堀の深さを測ろうとするところを松平伊豆守が傘をさしかけ、両者がキツとなる場面。酒がからむ場面といつてもこれは緊張の一瞬であろう。酒にまつわる舞台として、やはり逸し得ないもの、丸橋忠弥といえはこの場面を思い出させるほど、劇の設定としては巧みであるといわなければならない。

「大盃酒戦強者」（おおさかづきしゅせんのかつもの）という武田の旧臣馬場三郎兵衛の話がある。武田家が亡んでのち、下郎に身をやつとして内藤紀伊守に仕えていた

三郎兵衛が、たまたま客として招かれた井伊掃部頭に本身を見破られて槍の試合となり、大盃に酒を頂いて昔語りをするという話なのである。心ならずも二君に仕えた武士の、述懐の悲壯感ともいふべきものが、観る者の心に迫らずにいない。

「勧進帳」では、必死の努力で関守の疑念をはらした弁慶が、大盃になみなみと酒を注がせておわり、はては手酌でぐいぐいとやつのける場合は、酒が無限の心理を表現して、みごとである。「魚屋五郎」のようなアリズムの舞台ではないが、緊張の果ての一転した心のほぐれが、酒をかりてみごとに描かれている。

先代幸四郎・現幸四郎・故中車、あるいは松緑・長十郎・先代猿之助など、数々の弁慶役者が見せた力感あふれる名舞台に、酒が一役買っていることを思うと、世の中がどう移り変わると、酒はいついつまでも人の心をいたわるもののように思われる。

きいたこと、考えたこと クロンシユタツト講演会

野口 清子

三月十三日の「クロンシユタツト講演会」は秋山清の司会で始まった。

菊地昌典は「ロシヤ革命とクロンシユタツト」でこういつた。

ロシヤ革命という偉大な人間の革命が60年間に風化した第一歩だった、クロンシユタツトはレニングラードの入口にある要塞島で、軍艦に乗る水兵は技術家でもあり、教養と高い意識をもっていた、ロシヤ革命の開始を告げたオーロラ号もここから出港しており、一九〇五年や十月革命の時、反乱を起した。ソビエト政府はアナキストとメンシユビイキが帝国主義と手を組んだ反乱だと言っているが、何の為に反乱したか。

「革命は、人間を解放するためだのに社会主義のイメージをこっぴどみじんにしてしまった。」と終った時、共感の拍手をしてしまった。

ソビエトも中国も、人間解放のイメージを破壊して来ている。藤本和貴夫の「クロンシユタツト反乱」は、反乱の背景となったソビエトの国内状況を語り、当時は人民の誰れもが銃をとるべきだといふ考えだったが、いつか専門家による軍隊ができあがっていった。

この反乱は、クロンシユタツト、ソビエトの反乱というべきである。両氏の講演をきいて、社会主義社会に於ける指導者と人民が、支配者と被支配者の関係になつてしまふことのやりきれなさを感じると共に、権力者をつくらない道はないものかと思つた。

こっぴどみじんになった社会主義のイメージの中から、不死鳥のように飛び立つ、階級なき社会。誰もが自分の能力を発揮し、平和に豊かな生活を生みだすことができるような、権力なき社会を、人間は創りだすことができるのだろうか。

唄について

黒川 洋

戦時中の唄で「特攻隊節」というのがあり、「白頭山節」をテンポアップしたようなメロディーなのだが聴いているとなかなか面白い。

燃料片道 テンツルシヤン

涙で積んで

行くは琉球死出の旅

エーエ 死出の旅

地上離れりや テンツルシヤン

この世の別れ

思い出します母の顔

エーエ 母の顔

雨よ降れ降れ テンツルシヤン

せめても雨よ

整備する身のこのつらさ

エーエ このつらさ

歌詞の内容から想定すると、機に

乗って飛びたつ側のものではない。テンツルシヤンという個所がデスベレートに開き直ったところのあるやけっぱちな唄であるけれども悲しい唄である。おそらく機を整備する側の人達が、飛びたつて行く者への力づけのために唄ったものか、飛びたつて行く者への心情を代弁する形で形成されたものであろうと思われる。特に三連目の「整備する身のこのつらさ」にかかる整備兵の労働のつらさと、整備し終えた機に乗って再び帰らぬ若い兵達が現実目の前に居たという事実から、整備兵達の心情のつらさが競合しているわけであり、少しでも出撃を遅らせてやりたいという想いが潜んでいると考えては、私の深読みであろうか。ちなみにこの唄は戦後のまもない時期沖縄でひとりの老婆が蛇皮線の音のせて流して歩いていったものが採譜され、佐伯亮編曲でレコード化（作詞作曲不詳）されたものであるらしい。この唄の原形がいじられていなければ、ポピュラーな「かわいいスーちゃん」などより

もすぐれた反戦歌であると思われる。もつとも、「かわいいスーちゃん」の歴史は以外に古く、稲垣真美著「もうひとつの反戦譜」（三省堂刊）によれば、昭和十三年（一九三八）の三月、長崎県下のある町で二十一才の青年が唄っていたら警察に引っぱられたという記録が当時の特高月報に記されているそうである。唄を口づさんで警察にとにかく言われるという時代状況などは思いつくことも出来ないが、戦後になってから記憶している限りでは新宿のフォーカ広場の件くらいのものである。又、レコード倫理規定（通称、レコ倫）というものが現代でもまかり通っていて、良序風俗を乱すような「やぐざ唄」や「性愛の唄」などはテレビ・ラジオで放送してはならぬという委員会などがいまだに存在するそうである。先日、淡谷のり子が戦時中発売禁止になった「夜のブラットホーム」を情感たつぷりに唄っていたのを聞いた。その人ならではの感であった。

アナキストの眼

近藤計三

岡本潤さんの「戦中戦後日記（抄）」が、「文芸」で四回にわたって分載されてから後、朝日新聞社の出版による（朝日選書）の一冊として、まとめて刊行しようというような企画があるとの話をちょっと耳にしたことがあった。しかし、結果はその話もいつか、ならぬかの理由で実現されないままに立ち消えてしまったらしい。

この（朝日選書）には、さきに小野十三郎さんの「空想旅行」もあって、その半自伝風な本と並べば、それもなかなかおもしろい企画でもある、と心ひそかに刊行をねがってはいしたが、どうやら資本の論理で、悪貨が良貨を駆逐したらしい。

そのときから、ぼくは私家版といったようなもので、なんとかまとめられないものか、と考えて寺島珠雄くんに相談をもちかけた。

すると、話のつてくれ、「文芸」での抄出で割愛した部分も完全に復元しては、といってくれた。

もともと、日記などというものは、とりたてて公表すべき質のものではないし、一個人の間のプライベートな軌跡の領域に限定されたとくに主意が含まれるものであろうことは、よくしっている。

にも関わらず、あえて一冊にまとめたという意欲を抱いたのは、岡本さんの日記の、その個性の軌跡を通しての、文学・正史に対応する側面史の叙述の客観性といったものであった。もつと別ないい方をすれば、正史そのもののへの疑問がいつもぼくにはあって、むしろ側面史にはみでてくる正史への関心をそそられたとでもいえようか。

一例をあげると、「日記」の昭和二十年十二月四日付には「会社をつぶしては元も子も無くなるといふ懸念が一般に多く、これが弱腰にさせ、妥協的にさせてゐるのだ。労働組合の限界といふものをかういふ所でハッキリ知らされる。略：組合といふものが所詮、経

やや硬い万年筆の味

寺島珠雄

詩の原稿は何かと手直しも多くなるので鉛筆書きしたが、これは万年筆で書いている。ペリカンである。

亡くなった岡本潤さんから、私は有形無形にさまざまなものをもらった。このペリカン万年筆は、なかで一番、いわゆる遺品らしいものだろう。

新着の日本現代詩人会報に岡本さんの亡くなった記事があつて、見出しは次のようになっていた。

先達詩人（昭和五〇年度本会

顕彰）／岡本 潤氏逝去

先達詩人というのはおさまりのよくない言葉と私は思うが、とにかく現代詩人会ではいつからかそういう詩人を「顕彰」して記念品を贈っているようだ。いま使っているペリカンはその記念品で、岡

本さんはそれを入院三年目の病床で贈られた。

そして見舞いに行つた私に「きみ、使ってくれよ」と、遠慮するすきのない無造作な渡し方してくれた。それでも私は、ひよいと掌に載せられてしまった熨斗紙つきのケースを岡本さんに戻そうとはしたのだ。

すると岡本さんは「ぼくはもう使いやしないんだから……」と言うのであった。そばには娘の一子さんもいたが、岡本さんのあの一言は多分耳に入らなかったろう。そのとき、私は不意打ちをくらったようにうろたえた気分で一子さんの方を窺ひ、聞こえなかったらしいなと安心したことを記憶している。

岡本さんは自分の病状をどう考えていたのか。樂觀も悲觀も、はじめからまるで口にはせず三年も経過して、急になぜあんなことを言ったのか。

あれは、私が万年筆を受けとりやすくしてやろうという、岡本さんの心づかいの言葉だったのかも

知れないが、聞いた方は実にたまったものではなく、受けとりやすいところではなかった。結局は受けとって大阪へ帰り、あまり使わずに、ケース、熨斗紙ごとだいいじにしているが。

万年筆は細字（あるいは中字）向きで、使い方が少ないせいしか書き味がやや硬い。

岡本さんも創刊メンバーの一人だったコスモスに、岡本さんのことを書くには、そのやや硬いところがいまは適しているのだろう。（78・3・27）

詩の放送について

北本哲三

ABSという秋田の地方放送局のラジオ放送のローカル番組に、毎週金曜日に「土に生きる仲間達」というのがある。詩を朗読して余った時間を民謡など流して十分間の時間をふさいでいるものだが、一昨年から押切と二人で隔月でその選稿を依頼された。昨年から二

人では容易でないといったら、それではということでも小坂太郎を入れて、三ヶ月に一回ということになった。週に一回だから大体月四回という計算になるし、たいしたことはないようだが、やって見て意外に容易な仕事ではないということだ。これはわたしだけだけでなく押切も常にいつているので、あながちわたしの恩け性ばかりがいわせることではないようだ。最初の一年は「農民詩」ということだったので特にそうであったが、昨年

「押切順三全詩集」の受賞

万葉集

伊藤正斉

から対象を拡げてくれたけれど、お互いにダブらないようにするだけでもやさしい仕事でないと思っている。そこでお許し願いたいのだが「コスモス」同人諸兄の作品も無断で拝借する場合もあるということがある。これまでもあったし、これからもあるだろうと思われる。活字になるのであればそれを送って、前でも後でもお許しをいただくべきであったが、放送しつ放しであるという安易な考えが、非礼をおかさせて今日に及んでしまった。今後は気をつけなければ

ら話が出ているということもつけ加えて置きたい。

と思っているが、重ねてお許しをお願いしたい。

「押切順三全詩集」が「農民文学賞」を受賞することになったのはご承知の通りと思うが、その外に「秋田県芸術選奨」を受賞することになった。これは、県の文化課が主体となって、その年毎の文化活動が非常に優れたものであつて、県の文化の誇りになると思われものゝ与えられる賞で、三年ばかり前からこの賞を設定し、毎年四、五人ぐらい受賞している。押切はもとよりこうした官制的な賞には批判的で、その受賞にこだわりの見せたが、わたしたち友人は、くれるというものは邪魔にならない限り貰っておけ、と説得して貰うことになった。四月十二日に県庁の正庁で受賞式が行われるが、わたしもお祝いに参列したいと思っている。

この二つの受賞をする「押切順三全詩集」を秋田の仲間たちは誇りに思い、適当な機会にお祝いの会をやりたいものと、そこちか

愛知教育大学教授を定年でやめてからも中京大学で万葉集の講義にとり組んでいる松田好夫先生は、私が小学校四・五年生二年間教えてもらった先生であつた。

ようはげましてくれた。

小学校を卒業して丁稚にいつてからも、先生が宿直当番のときは文法と万葉集を二三のなかまと一緒に教えを受けた。私の国文学にたいする興味はそのころから募つた。万葉集の山上憶良の短歌や長歌、伊勢物語、枕草紙、芭蕉の奥の細道などの、冒頭などを暗誦するのがたのしみの一つでもあつた。

万葉集巻一の冒頭歌、雄略天皇の

籠（こ）もよ み籠持ち

ふくしもよ みふくし持ち

などもその一つである。先日任展慧さんから「三千里」という季刊誌の寄贈をうけた。その「三千里」十一号には、「古代日本と朝鮮語」と題して、金達寿が興味ある評論を書いているのを読んだ。「籠（こ）もよ み籠持ち」の解釈は、通りすがりの雄略天皇が、若菜摘む少女をみそめ求愛する、というように教つたのだが、新羅の「吏読」と万葉仮名とは、その表記法が原則的に一致している」（大野晋）

この吏読法で解釈すると、「至急告知するぞ。知りて服しつかえ

よ。世界の人を安どせしめる泊瀬

（はつせ）朝倉の高御座に至急服しつかえよ……」というようなことになるらしい。新羅の吏読法で万葉を解釈しなおしたらどういふことになるか。今この問題が私をとりあえてはなさない。

岡本さんの本

河合俊郎

死をきいてまっ先に頭に浮んだのは、昔板橋のお家の堀にへばりついて真紅に燃えていた萬のみごとな紅葉だつた。あれは昭和二十六年のある夜だつた。貧しいおのぼりさんのわたしを一夜親切に

とめ、詩の話などきかせてくれたことがあつた。その頃の岡本さんは心身ともに若々しく、年令がわからず、奥さんに、「お母さんですか」ときいてしまった失言など

のうしろめたさもあり、翌朝早々においとました時、ふりかえるとあの真紅の萬が目にしみた。

次に頭に浮んだのは、岡本さん

のでつかい怒声だつた。今はつきりしないが、秋葉原の駅で乗りかえの切符を渡さないでいいのに、渡してしまつたおのぼりさんのわたしのために、駅員にかけあつてくれた時、駅員がごてごていつて返してくれないのに業をにやし、「きさまそれでも労働者かバカ！」と怒鳴つた時の声の大きさにはあたりの人びとが立ちどまるほどだつた。

岡本さんの詩はほとんどぜんぶ読んでいた。敗れたものや虐げられたものに味方し、いつも背後に怒声が響いていたように思えてならない。

岡本さんの本のなかで、わたしがいちばん何回も読み続けたのは「こどもの詩が世界を変える」という本だつた。この本は、こども

の詩を鑑賞したり解説したりした内容で、昭和三十九年四月に少年写真新聞社から出版されたものである。この本のとがきで岡本さんは、「こどもたちが無意識のうちに、自由な精神を発揮して、ぼくが思いきつてやれないような詩概

念の打ちこわしを、平気でやってのけてみせるからです。そういうこどもの詩のもつ自由性を吸収して、ぼく自身の変革のモメントにしたい、そういう欲求が、ぼくにこの本を書かせたモチーフだつたといえましよう。」といっている。

当時、わたしは小学校の教師をしていて関係もあり、この本はすり切れるまで読み、授業の中や、こどもの人間性を考えるうえで随分参考にさせてもらった。そのころわたしもつとも共鳴したところは、秋山さんの「象のはなし」や小野さんの「とほうもないねがい」などを引きあいに出して、岡本さんが次のように書いている点である。

「おとなの詩も、こどもの詩も、詩であることにかわりないと思つている。それはおとなとこどもだから、感じることや考えること、それをあらわすこととばかりいなどにはちがいがあろうが、外面はどんなにちがっていても、詩の本質にはちがいはない。」

沈下

押切順三

一トンの石を敷き、
さらに一トンの石を組み
その要に三トンの石を据える。
クレーンは鎖をきしませて
大ものを、正面に吊るした。
そこだ、
ずしり、
鈍い衝撃音で、石は地を打った。
土が裂けた、

少年は、
自転車飛ばしていた。
地面のずつと先が
ふいに、右に傾いたとしきりに言う。
沈下が始まる。
重い浸潤が帯状にのびてゆく、
幹線道路のはしで、

鉛管がよじれて
かすかな亀裂が走った。
にわたりを飼えないむらに冬がくる。
土が凍みる、
ゆれていると、少年はしきりに言う。
どこで、なぜか、
まだ背だけの低い防雪林、
その枝先も沈む。

また、ひとりの離脱、
梁に綱を巻く、
ずしりと、ここでも重い沈下。
彼をみつけるに、
長い時間がかかった。
広い平面でなく
せまい立体の空間で死んだ。

きよう、横なぐりの雪、
口もとから息をうばう。
抑留地・の
その屋根も見えず、
ただ、灰色の混沌だけが走る。

(一九七八年二月・大瀧村)

花瓶小史

寺島珠雄

花を買うのは
砂糖を買うよりもはずかしいことだから
花瓶はずっと押入れで寝ている。
何年だろう。
この部屋へ移るとき
花瓶は荷物のなかにあった。
くれた娘は
二人めの男の子を背負ってときどき実家へくるまでは見たが
最近は見えない。

——K君、と
おれも顔見知りの青年の名をあげて
娘は彼とのいきさつを語ったことがある。
美術館裏の半地下喫茶店。
いつも、ひとりになりここにこへくるのです。
——わたしのクニでは、男が日本女性を妻にするのは認められ
れます。けれどわたしが日本人K君の妻になるのは許され
ないのです。
そしてKとのことは過去、いまは……

コンタクトレンズの目を
有料庭園のみどりが映る窓に向け娘は言葉をつづけた。ある
いは話を飛ばした。
——でもわたしにはやはり縛られるところがあります。
まもなく、というくらいの時期に
娘は同じクニの青年と結婚したのだが
花瓶をくれたのはいつか。
はつきりしない。

一度
遠いまちの新居へ招かれたが行かなかった。
その手紙
便箋の方の署名には漢字に彼女のクニの発音が添えてあった。
日本のカタカナで。

当時
すでに花瓶を押入れに寝かしていたか。
前の部屋、木格子の嵌った窓ぎわに置いて
眺めたときもあったような。
ともかく、一度も花を挿さないのはたしかな花瓶が
いまある。
砂糖を買うよりも
お好み焼を食うよりも
花を買うのははずかしいことだから。

(78・3・25)

敗北

高島 洋

通勤の途中、わたしは
毎朝、川西能勢口という駅から
山のなかえ北上する電車に乗る
昨日、車窓から見たのは

荒狂う暴風雨のなかで、はげしくゆれながら耐えてい
る山の木々である

枝葉はひとつの方向に吹きながされ
また反対の方向に大きくゆれていた

企業も力つきて双手をあげるまでには
粉飾決算に浮身をやつし

はらわたを容易に見せぬ
いよいよ金融すじからも見放され
どうにも方策がなくなると

重役陣は急に力を喪失し

ついには雲がくれする

債権者によってベールがはがされると

こうも悪かったのかと

深い吐息ではすまされぬ その裂け目

あえぎ

策謀に破れた

くろい経過

わたしは今日も

山のなかえ北上する電車に乗る

車窓から見えたのは

暴風雨のあとの生木の裂け目である

永年、山のなかで風雪に耐えてきた大木が落雷にでも

あつたように

見事に裂けて幹の途中からどつと倒れているのだ

それはまた無惨な敗北

豪雨のあとの日光をうけて、その裂け目は生々しい

彼女とおうむ

和田 英子

定時前

書類発送室は仕事のピークを迎える

持ち込まれた書類郵便物の

締め切りどきだ

係員は手ばやく仕分け 発送準備を整える

手なれた作業の合い間に

若い女子社員と冗談がとび交う

忙しく活気ある空気を余所に

部屋中央

動かず

机に向い静かに本を読む女性がいる

元いた部署に後任者が着任し

うき上ったかたちで

この部屋に移って来た人だ

彼女は机を離れて他の建物へ出かける

往復の所要時間十二分

書類送達が終り席に戻る

他に与えられた業務はない

少ない職務を守り本を読む人の

才媛をうたわれ

かつて一万人分の厨房をとりしきった矜持は

和服の襟もとに残り

古い知り人と雑談し笑う目もとが

ときになまめく

昨日から明日へ

明日から明後日へ

秋の定年日まで続く

強制されぬ束縛と

束縛された拘束時間

ひとりぐらしの帰路

駅に降り立つと

道端のおうむが出迎える

こんばんわ

お前と会うのはあと二百数日だよ

口の中でつぶやくと

おとなしいおうむは了解し

彼女は見えぬおうむの背を見定めて

道を過ぎる

大きな胸

姜 舜

小賢しく、人間は
さまざまな自分の胸の幅を
偉人のように信じすぎる。
あこがれが空想の青空を駆けめぐり
英雄気取りの欲の皮が突つぽると
自分の胸のふくらみを銜い
得手勝手に肺活量をわすれて羽搏く。

やがて嵐に出逢った鳩のように
自滅の淵をまえにして立ち留まり
充血した眼でくらい天を見上げる。
みずから招いた破碎の光景におののき
ちいさな自分の胸を掻きむしる。

視界のかすんだ胸は
もう自分の垣根を越えた大きさを追わない。
胸囲ほどのちいさな悦びを見付け
盲信にあけくれた日々が

むなしい虚像にみえてきて
しおらしく胸の生地へたちかえる。

夜の部屋にみなぎるのは稀薄な空気だ。
悪魔の絵をまさぐり
もんどり打った苦しみから
野辺をわたるみどりの風を吸いあげたとき
復活のあさのように蘇る胸。
胸に巣喰うかなしみから
ときめきの衰えた胸から
他人の眼の光とあしたを読みに出掛ける。

人間は、さまざまな
自分の胸を廃墟のように軽蔑する。
それでも 拡大された他人の胸を崇め
先陣の誉をうけるためにふためくけれど
やがて 全能な存在に食い殺された
ちいさい自分の胸の死を見詰める。
人間よ、胸よ
大いなる胸よ
胸に胸以上のことを期待するから
人間の胸はいつも若く
そして 人間はかなしい我楽俱多だ。

カササギの声

梁 性 佑
(姜 舜・訳)

一匹の蜘蛛と　そして小さな
火取虫、身じろぎもしないで抗う
蠅っ仔にいたるまで
ぼくがいとおしむようになったことを
よろこびながら

朝になると飛び上がらんばかりに驚き
カササギの啼く声に耳をそばたてる。
ひとえに囚われてるからだけではなく
眼にみえないからなのかも知らないけど
朝になると斯くもすべてのものが
みたくてたまらなく、
もしかしたらこの世の末期を
生きてるのではないかと訝るわけは
ぼくがまだ
世間をよく知らないためだろうか。

ぼんやり坐ったままでも
夕暮は来るけれど
あかつきに啼くカササギの声ぐらい
ぼくを生け捕りにし
砕けんばかり抱きしめたいものたちに
出逢うために
ぼくが此所へ
来たのだとは言えないにしても
埃にまみれた蜘蛛の巣や鼻をつまませる小便臭さまで
が

涙がこぼれるほどにも愛するようになったことを
よろこびながら
朝になると飛び上がらんばかりに驚き
カササギの啼く声に耳をそばたてる。

梁性佑——朴政権に抵抗するわかい詩人、詩
集「冬の共和国」は発禁となり、かれは
その出版のために連行されている。これ
はその詩集の中の一つ。
カササギ(鵲)——朝鮮に多くいる。腹の部分
が白い。朝方啼くと吉兆とよろこばれる。